

化政期文人活動における長崎というベクトル —「菅井梅関送別書画幅」と「娛心遊目帖」から

Nagasaki-A vector in the Bunjin activities of the Bunka-Bunsei Period (Early 19th century),
— About “Sugai Baikan Farewell Picture Width” and “Goshin-Yumoku Book”

ソーシャルデザイン学科

渡 邊 雄 二

Yuji Watanabe

はじめに

江戸時代後期において、全国の書画家を中心としたいわゆる文人活動は、それぞれの子弟、交友関係などについて言及されることは多いが、彼らの関心が長崎に向いていたことを指摘することは比較的少ない。本論では化政期に書画を中心とした文人活動を行った人々の長崎とつながった具体的な作例とその制作経緯から、彼らの活動がどのような意味を持ったのか、検討してみたい。

一つは菅井梅関との送別の際に書画家から贈られた書画を合作した掛幅「菅井梅関送別書画幅(以下、梅関送別幅)」3幅である。菅井梅関は化政期を中心に活動した仙台の画家であるが、文化10年(1813)ころ長崎を訪れて、当時、来朝していた清人江稼圃に絵を学んだとする。梅関は文政5年(1822)に上京するまで、長崎など九州に滞在したようだ。「梅関送別幅」は梅関が文化12年に一時長崎を離れる際に当地で交友があった人々が書画を寄せ書きした掛幅である。寄せられた書画は来航した清人や長崎の書画家によるものである。

そして、「梅関送別幅」と作者が複数重なる書画帖がある。東京藝術大学美術館に所蔵される「娛心遊目帖」で、江戸や関西を中心とした大名、書画家、清人などの書画106点を貼るが、「梅関送別幅」と長崎に関係する作者が共通する作品が載り、その制作時期も近い。「娛心遊目帖」の成立は明らかではないが、江戸や関西の書画家の作品を単に収集したものというよりは、化政期において書画を寄せた人々が有機的に結びつきながら、長崎への関心も含めて成立した書画帖ではないか

と思われる。

江戸時代後期の文化人たちが長崎と関係をもった書画家の主な交渉の対象は来舶の中国人であった。彼らの多くは通商の船頭や財福となった商人であった。錦織亮介氏はこの時期の来航中国人の特徴として、文人趣味、書画への関心が高かったことを指摘している^(註1)。江稼圃のように科挙を受けた経歴の人物もおり、詩書画への造詣もあったと考えられる。しかし、ほとんどの人物は今日、書画家として知られない。

長崎への関心は無論、中国への関心であった。そのために長崎で来航の中国人と交流し、彼らや彼らもたらした文物によって自らの知見を広め、書物を手に入れることができたと思われる。

本論の書画及び史料は、そうした化政期を中心とした時期の彼らの交流の状況や長崎の位置を示す好資料である。これらの成立は菅井梅関という一人の人物への送別書画を契機とするが、その背景には梅関とつながる江戸や関東の書画家、とくに江戸の谷文晁とその弟子、あるいはそのほかの地域の書画家の存在がある。そして、江戸時代の書画家、ここでは文人と称するのだが、彼らの志向における長崎の存在について示唆する点があると思われる。無論、小論によって、この問題を説明することは、とうていかなわぬが、化政期の文人の様相として一つの材料を提示できればと考える。

1 梅関送別幅

「梅関送別幅」の成立の背景を簡単に述べる。菅井梅関は、天明4年(1784)に仙台に生まれ、

根本常南に書画を学び、仙台での作画に従事したのち、江戸に出て谷文晁に学んだ。さらに京坂へと向かったのち、長崎を訪れた。その動機はたまたま京都の店先で江稼圃の絵を見たためとしている^(註2)。しかし、そうした伝説的なエピソードに疑問が持たれる。それは後にも触れる梅関とかかわりがあった書画家、文筆家は、すでに実際に長崎を訪れていたことによる。梅関が師事した文晁とかかわりのあった大田南畝、市河寛齋、春木南湖などは、梅関以前にすでに長崎へ行き、その情報を逐次つかんでいたと思われる。また、後述するように長崎の劉梅泉が各地の書画家とつながっており、多くの文人書画家が長崎への関心を示していた状況があったのではないと思われる。

梅関が長崎へ行った時期は文化10年ころとするが、正確につかむことはできない。そして、江稼圃とどのように交友したかも明らかではない。それは、江稼圃の長崎での足跡を正しくつかめないことにもよる^(註3)。長崎を訪れて江稼圃との交渉が知られる武元登々庵、浦上玉堂・春琴、大田南畝、伊沢蘭軒、齋藤秋圃などの記録や作品に江稼圃との交渉がわずかに残されるのだが、江稼圃は弟の江芸閣のように文筆は達者ではなかったようで、絵画以外の足跡を多く残さない。また、長崎への来航も数度に分散しており、「日本の画家が江稼圃に学ぶ」ことは、なかなかかなわなかったようだ。

ここで紹介する長崎の清人を含む書画家による送別の寄せ書きは、梅関の長崎における交友の証だと考える。ただし、その中にも江稼圃の書画はない。

梅関への送別書画幅は上記したように現在、仙台市博物館所蔵の2幅（仙台市博本）、長崎歴史文化博物館所蔵（長崎歴史文博本）の1幅が確認されている。このうち現在の長崎歴史文博本が「特別展 孤高の画人・菅井梅関一没後百五十年記念一」（平成六年 仙台市博物館）で展示、紹介されている。展覧会図録の解説には現在の仙台市博本2幅の存在が『東北遺物博覧会記念帖』（昭和8年）に掲載されていたとし、すでに知られた存在

であったが、近年、仙台市博物館に所蔵されることになった^(註4)。

また、梅関の送別のようすを荒木君瞻が描いた「梅関高士送別会之図」（仙台市博物館蔵）があり、金井烏洲の兄莎邨の文政元年（1818）の賛から梅関送別の宴にいた江芸閣など長崎で交友があった人物の様子が判明する^(註5)。しかし、なぜ梅関がこれほど、長崎の書画家たちと交友し、多くの送別書画を受けることができたのかは不明であった。まず、これらの梅関送別幅の内容を見ていきたい。

・梅関送別幅（仙台市博本） 2幅

一幅は菅井梅関に宛てたもので、鄒静岩の題字が幅の上部に書かれる。もう一幅は「仙府南湖」すなわち仙台の南湖という人物に宛てたもので、劉培原の題字が書かれる。つまり、厳密に言えばこの幅は梅関ではなく、南湖という人物に贈られたものであるが、体裁や作者に共通点が多く、対として伝わる。この南湖については、どのような人物か特定できていない。

一 梅関送別幅（東齋宛） 1幅

題字は幅の最上部に大きく書かれる。年記「嘉慶乙亥」は文化12年（1815）である。題字では「東齋（菅井梅関）先生の仙台に帰るを送る」とするが、実際は、梅関は仙台には帰らず、長崎を一時離れて九州を遊歴していたという。書かれた場所の「清眼亭」はおそらく「青眼亭」で、梅関の送別の宴が開かれた場所である。この青眼亭において、梅関は文化14年（1817）に長崎港図（心田庵図・長崎歴史文化博物館蔵）を描いているので、実は早々に長崎に戻っていると考え^(註6)。また、筑前の画家齋藤秋圃が挿図を描いた俳画集「うめわさむ」（文政2年刊）に梅関も参加しており、九州での画業が知られる。

本幅の年記の干支は、乙亥、丙子、すなわち文化12年と翌13年である。以下、作品名と作者、

落款を記す。

題字以下の書画は、画幅を四等分する朱の線で囲まれ、15cmほどの幅の画面に書かれる(図1)。

・(題字) 鄒静岩「送東齋先生歸僊臺 嘉慶乙亥九月書於清眼亭中 吳門 鄒静岩」

(第1段 右から)

- ・靈芝図 (図) 劉松祿 (賛) □□園道人
- ・詩 鄒静岩
- ・山水図 (図) 大美 (賛) 汪松巢「右録子成雅君詩 乙亥菊秋 西湖汪松巢」
- ・五言詩 江芸閣

(第2段 右から)

- ・二行詩 劉福邦「嘉慶二十年乙亥菊秋五日贈送以詩半絶」
- ・梅図 (図) 簾布 (賛) (朱) 柳橋「乙亥冬抄」
- ・五言詩 金琴江「乙亥秋菊有黄卷月為東齋先生正 蘇臺金琴江」
- ・観瀑図 崎陽 叔明 (城玄同か)

(第3段)

- ・菊図 秋庵桐
- ・詩 劉夢澤「文化乙亥晚秋 送東齋先生通門」
- ・冬景山水図 劉梅泉
- ・七言詩 張秋泉「乙亥冬日 題為東齋先生正 張秋泉初稿」

(第4段)

- ・山水図 籠池 (印)「光晴」
- ・七言絶句 姚省蘭
- ・三行書 汪介春
- ・山水図 吳墨酣 (吳楓山)

(第5段)

- ・七言詩 広東 林徳言
- ・七言詩 古監 陶栗橋
- ・山水図 妙言 (鉄翁か)
- ・七言詩 楊西亭「丙子夏日 楊西亭書」

(第6段)

- ・唐船図 (画・賛) 石崎融思
- ・象図 荒木君瞻
- ・三行書 峰子謙
- ・山水図 石崎融濟

(第7段)

・オランダ詩句 フレデリック・ドゥーフ「1817」^(註7)



梅関送別幅 (東齋宛) 仙台市博物館 (図1)
 縦152.0cm 横58.1cm

- ・三行書 朝鮮李萊嶽
- ・農夫図 柳岐山
- ・安南国 隊長□ 五長宝 隊長敬 五長平 五長良
嘉隆十五年

2 梅関送別幅 (南湖宛) 1幅

東齋宛の幅と同質の絹に寄書きされる。本幅は題字以下、画面を3分する朱線の囲みに書画が書かれる。段数も6段で、東齋宛幅よりも書画は少ない (図2)。

- ・(題字) 劉培原「嘉平 嘉慶乙亥六月 為仙府南湖君需」

(第1段 右から)

- ・菊図 画 劉松祿「乙か癸菊月寫」賛 (花押)
- ・三行書 朱鑑池「乙亥秋日」
- ・山水図 玄同 (城玄同)「丙子春日」

(第2段)

- ・寒山寺詩 小山
- ・唐船図 大美
- ・寒山寺詩 江芸閣「乙亥中秋望前一日録 崎館蘇臺江芸閣」

(第3段)

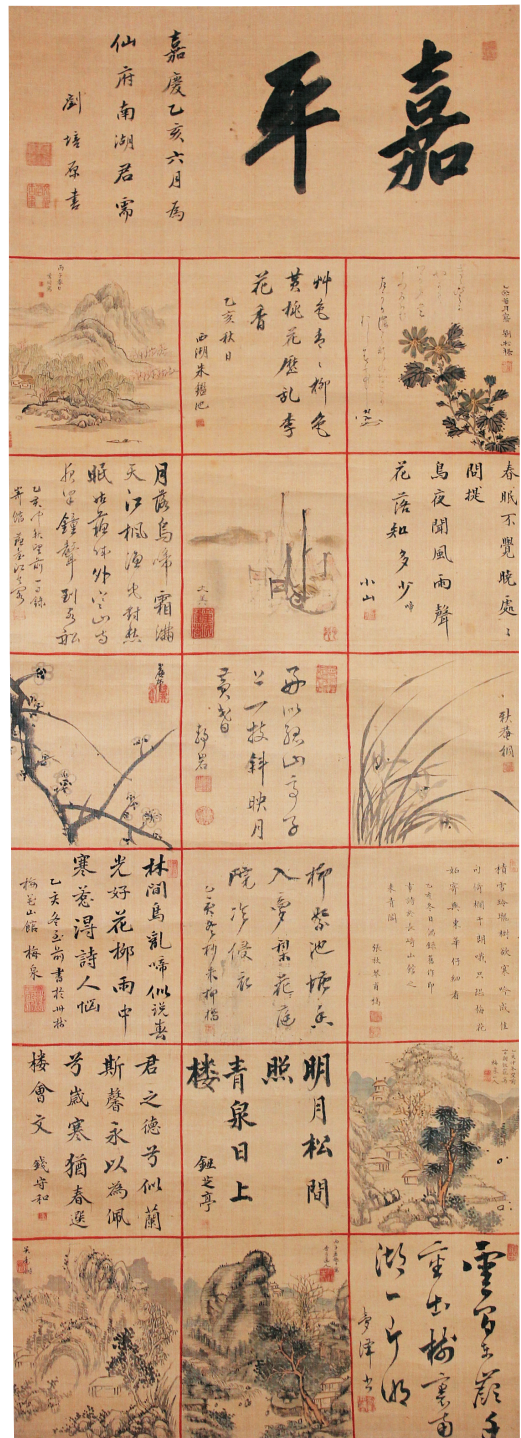
- ・蘭図 秋庵桐
- ・三行書 鄒静岩
- ・梅図 簾布

(第4段)

- ・七言詩 張秋琴「乙亥冬日偶録旧作 即事詩於長崎山館之來青閣」
- ・三行書 朱柳橋「乙亥冬抄」
- ・三行書 劉梅泉「乙亥冬至前書於卅枝梅筆山館梅泉」

(第5段)

- ・山水図 劉梅泉「乙亥仲冬望前二日飯罷写 劉梅泉山人」
- ・五言詩 鈕芝亭
- ・四行書 錢守和



菅井梅関送別幅 (南湖宛) 仙台市博物館 (図2)
 縦131.0cm 横46.5cm

(第6段)

- ・ 三行書 劉夢澤
- ・ 山水図 香谷道人 (鉄翁か) 「丙子孟趣日写」
- ・ 山水図 呉墨酣 (楓山)

3 梅関送別幅 (長崎歴文博本) 1幅

絹本淡彩、着色、墨画、墨書など (図3)

題字は江塚圃の弟江芸閣で「東齋先生の山水に遊ぶに送る」と、仙台へ帰る送別の仙台市博本とは言い方が違う。もしかすると長崎の周辺を遊歴する梅関のようすを示しているかもしれない。仙台市博本よりもやや幅広で、題字のほか各段5枠の書画を並べる。年代がわかるものは丙寅 (文化3年)、丙子 (文化13年)、丁丑 (文化14年)、戊寅 (文政元年)、丙戌 (文政9年)、庚子 (天保11年)、壬寅 (天保13年) である。すなわち仙台市博本と制作時期が重なるものもあるが、長期にわたって作成されたと考える。

(題字) 江芸閣「送東齋先生 遊山水 姑蘇江芸閣」(山水図) 劉松祿「丙子春日 劉松祿」

(第1段)

- ・ 望月図 八公山人
- ・ 三行書 朱柳橋「丙子仲春既望」
- ・ 山水図 劉梅泉
- ・ 七言詩 鄒静岩「嘉慶丙子春二月」
- ・ 山水図 墨酣 (呉楓山) 「丙子桂花月上潮」

(第2段)

- ・ 七言詩 江芸閣
- ・ 漁夫図 (画) 藍亭 (賛) 唐雪亭
- ・ 二行書 劉香巖「丙子花月書於崎陽館中」
- ・ 山水図 (画) 大美 (賛) 朱柳橋「丙子三月上旬」
- ・ 三行書 (大美画の題) 汪松巢

(第3段)

- ・ 双鳥図 姚 (桃) 江 印「松谷」
- ・ 七言詩 北筑 蘭圃
- ・ 山水図 龍池 印「光晴」
- ・ 三行書 劉培原「丁丑孟春」

- ・ 牡丹図 半江

(第4段)

- ・ 唐船図 大美
- ・ 山水図 靄厓
- ・ 梅図 (画) 「覚か三」(賛) 安南国 五長宝
- ・ 文人図 南豊 櫻園「文化丁丑仲冬写於崎陽」



梅関送別幅 (長崎歴文博本) (図3)
 縦150.5cm 横67.5cm

- ・三行書 顔遠山「丁丑龍月録か」
(第5段)
- ・山水図 庚子冬日 墨露
- ・文字絵 朝鮮 智讚「朝鮮妙香山智讚書」
- ・太湖石図 天香
- ・文字絵 (鶴) 智讚
- ・山水図 曲江「壬寅初春 八十五翁 曲江写」
(第6段)
- ・七言詩 楊西亭
- ・山水図 妙言(鉄翁か)「慧遠」印
- ・四行書 智讚
- ・山水図 木下逸雲
- ・四行書 智讚「戊寅春日朝鮮妙香山人 智讚書」
(第7段)
- ・山水図 梅浦「壬寅早春写 梅浦散人」
- ・文字絵 「龍」 智讚か
- ・山水図 三山雍宗
- ・文字絵 「亀」 智讚か
- ・鶏図 琴岱
(第8段)
- ・五言詩 沈萬珍「右録唐人句 長州沈萬珍」
- ・岩に菊図 秋桐庵
- ・五言詩 夏南材「丙寅岑寢展此戲題 金陵夏南材」
- ・竹図 晴川
- ・七言詩 陸冬「道光六年歲次丙戌三月下澣録為東齋先生 呉門 陸冬書」

これら3幅は作者を共有する作品が多い。しかし、作者のなかには、書画家として知られない人物がほとんどで、中国人は来航商人として記録に残される人物である。

長崎の書画家では木下逸雲、劉梅泉、石崎融思、荒木君瞻、呉楓山など、落款から作者が判明する作品もある。「妙言」は鉄翁の号で^(註8)、同印の「香谷」も同人ではないかと思われる。

鉄翁、木下逸雲は江稼圃に学んだと伝え、それは文政元年ころとする説がある^(註9)。しかし、ここではすでに彼らは山水図に手を付けて、小画面ながら完成させている。

文化12年に鉄翁は25歳、逸雲は16歳と若年ではあるが、すでに江稼圃に何らかの師事をしたように思われる。ただここにも江稼圃の作はなく、梅関送別幅が成立した時期には、すでに長崎を離れていたのかもしれない。のちに江稼圃は文政5年(1822)に来航して、日本の書冊を買って持ち帰ったという記述が『続近世叢語』巻三にあるが、その外の事績が見当たらず、弟の江芸閣が長期あるいは頻りに日本と中国を行き来しており、江稼圃との連絡を取った可能性もある。

簾布については、荒木君瞻が描いた「梅関高士送別図」(仙台市博物館蔵)の賛に送別の宴が行われたのが「青眼亭」で、その「亭主人簾布」とあるので、青眼亭の主人であることが判明する。

朝鮮や安南の人の名前もある。李萊嶽については明らかではないが、両足院ほか、作例が現存し、日本との交渉がこの書画幅だけではなかったことがわかる。また、「妙香山智讚」と記す文字絵は、仏教寺院のある妙香山(現在の北朝鮮中部)の僧ではないかと想像するが、推定にすぎない^(註10)。安南人は隊長ほか伍長といった位をつけて、一字の漢字名を書く。また、オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの書もある。

これら3幅の清人のうち来航記録で判明する人物を下に記す。^(註11)

- 江芸閣 文化5年9番船財副、文化11年5番船頭ほか
- 鄒静岩 文化10年10番船頭ほか
- 陸秋実 享和元年未2の番外船7番船財福、文化3年3番南京船財副、享和3年2番船財福
- 劉培原 文化3年卯10番船頭
- 沈秋屏 文化8年厦門船船頭、文化10年3番、11番船頭、文化11年亥1番2番7番船頭
- 張秋琴 文化元年9番南京船船頭、文化2年8番9番南京船船頭、文化11年戊1番3番船頭
- 汪松巢 文化12年4番船頭
- 朱柳橋 文政2年6番船財福

- 朱鑑池 寛政12年5番船財福、6番船船頭、享和元年3番線船頭、文化6年4番、9番船
 楊西亭 文化5年5番船頭、文化8年4番船頭、文化11年4番船頭
 顔遠山 文政元年4番船財福、5番船頭
 銭守和 文化13年10番南京船脇船頭
 鈕芝亭 天保2年、顔遠山船の財副
 汪介春 文化13年8番南京船脇船頭
 林徳言 (建?) 清榮、文政2年来崎か
 劉福邦 文化13年5番南京船脇船頭
 金琴江 文政4年5番寧波船、文政6年5番南京船、文政7年3番寧波船、文政8年1番寧波船脇船頭、7番南京船、文政9年6番南京船、文政10年2番寧波船脇船頭、5番南京船、文政11年4番南京船、文政12年1番南京船船頭

そのほかの書画作者で下記の清人については、来航の記録などには記されない。

(絵画) 劉松祿

(書) 張秋泉、姚省蘭、陶粟橋、唐雪亭、劉香巖、沈萬珍、夏南材? 陸冬書、劉夢沢

先述した荒木君瞻の「梅関高士送別図」には、来訪の清人では賛文から江芸閣ほか金琴江、陸品三、張秋琴、劉福邦、沈均谷、鄒静岩らのようすが描かれることがわかる。なお、劉夢沢は市河寛齋との交渉が知られる(『瓊浦夢余録』)。こうした梅関の周辺には来航記録に出てこない清人もおり、彼らの詳細については、今後の課題である。

「梅関送別幅」に参加した荒木君瞻、石崎融思、鉄翁、劉梅泉、呉墨酣(楓山)らがほぼ同時期に制作した書画を含む書画帖がある。

2 『娛心遊目帖』

『娛心遊目帖』は、東京藝術大学美術館に所蔵される。伝来は購入での入手でそれ以前は不明とのこと。成立も明らかではない。「娛」「心」「遊」「目」と一字ずつ書かれた市河米庵の題字がある。



娛心遊目帖 市河米庵題字

題字の干支「丙戌」は文政9年(1826)である。これが画帖の成立であろうか。それぞれの書画の制作は文化年間前半から始まっている。各面、縦横ほぼ15cmの書画(一部扇面を切ったものがある)が全部で題字以外106面貼られている。作者は増山雪齋など大名をはじめ、文晁と門下、応挙と門下、森祖仙、月僊、巖斐、文鳳など京都画壇の画人、書画家のなかに^(注12)、先の梅関送別書画幅に参加した長崎の書画家や清人の作が含まれる。それらの制作時期が判明する作品は梅関送別書画幅同様、文化12年および13年である。

長崎の書画家によると思われる作品を『娛心遊目帖』に並ぶ順に列記する。番号は最初の書画からの通し番号である。(『江戸名作画帖全集X 寄合書画帖 文人諸家』1997年 参照)

・下線は先の梅関送別幅3件に参加した書画家である。

- 56 山水図 広渡湖秀「巖斐」
 60 山水図 鉄翁「妙言」
 61 岩に菊図 江越繡浦「錦賀」
 62 山水図 劉梅泉「丙子杏月写於浣花溪草堂 梅泉」(文化13年)
 63 山水図 呉楓山「秋山初霽 丙子桂月 長崎 呉墨酣」
 64 象図 荒木君瞻「長崎 君瞻」
 65 蜘蛛図 山村春耕「摸清人黃淳軒筆 瓊浦春耕画」
 69 唐人飲酒図 柳岐山「丙子仲春 柳岐山」(文化12年)
 70 山水図 石崎融思「竹窓茶話 丙子春間 石融思写」(文化12年)
 71 梅図 峰子謙「體寒宜雨露 香冷堪塵埃 峰子謙」

- 72 鶴洲「梅花窓下黄鶴 戲画林生更喫茶
鶴洲道人」
73 西園雅集 石崎融濟「西園雅集 石融濟
写」
74 山水図 蔣春洲「乙亥嘉平月 写於崎館
清遠閣 蔣春洲」(文化13年)
75 山水図 香谷(鉄翁か)「香谷」
76 書 江芸閣「滄江樹杪船 丙子元旦写
芸閣」(文化12年)
77 蘭に蜻蛉図 鏑木雲潭
78 唐子図 (鏑木か) 梅亭

「娛心遊目帖」は脈絡のない編集のようにも見えるが、これら作者の間には例えば増山雪斎、交友があった大名、雪斎の配下、青木南湖、題字を書いた市河米庵などの交流が認められる。

翻って市河寛斎、米庵父子が西遊し、長崎まで行ったことを思うと、作者は彼らが出会う可能性がある人物とも思われる。米庵の弟で大村藩の絵師となった鏑木雲潭、その子梅亭と思われる絵もあり、題字の作者米庵との関係を考えたい^(注13)。ただし、米庵、寛斎の西遊の時期とは制作時期は異なる。これらが菅井梅閑の送別に際して作られた書画と重なることは、梅閑が無縁とはいいがたい。「梅閑送別幅」と「娛心遊目帖」に共通した作者の作品を掲げる。

荒木君瞻

父大蔵は唐絵目利きで、君瞻も文化14年に唐絵目利手伝となる。古賀二郎氏が美人画にすぐれるというように、女性像が複数残される(『長

崎画史彙伝』「荒木君瞻」)。

「梅閑送別幅」、「娛心遊目帖」、どちらも象を描く。象の大きさを示すためか画面いっぱいに墨を用いて描く。これはおそらく文化10年に日本へ渡ってきた象かと思われる。このときの象については多くの絵画、版画が残される^(注14)。

君瞻の象は没骨で、輪郭を強く描かず、淡墨淡彩で陰影を巧みに描く。また、君瞻は先述した「梅閑送別図」を描き、梅閑とは親しい関係であったことが推測される。

鉄翁祖門

長崎・春徳寺(臨濟宗)の住持。初め石崎融思に絵を学んだが、長崎に来航した江稼圃に南宗画を学んだ。鉄翁が江稼圃の画法、画論を学んだことは弟子の倉野煌園が編纂した『鉄翁画談』ほか、田能村竹田の『竹田莊師友画録』に記される^(注15)。



妙言 梅閑送別幅(東斎宛)



妙言 娛心遊目帖



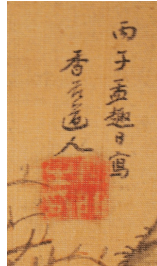
梅閑送別幅(南湖宛)



娛心遊目帖



香谷 梅関送別幅 (南湖宛)



香谷 娛心遊目帖



図は鉄翁の別号「妙言」を落款として書く。鉄翁の作品としては、かなり早い時期に当たる。同じ印を用いた「香谷（道人）」が同一人物であるか、これまで例を知らず、今後の検討としたい^(注16)。

石崎融思

唐絵目利荒木元融の子。西洋画法を父に受け、硝子裏より油絵を写照し、硝子に水銀をつけ絵鏡の法を西洋人に受けた。唐絵目利となり、フェイ

トン号事件において長崎港内外の陣馬絵図を命じられた。文化10年の紅毛二番船で長崎に着いた象をドゥーフの指示で写して『全象活眼』として、江戸へ報告した（『長崎画史彙伝』石崎融思）。

劉梅泉

「梅関送別幅」3幅、「娛心遊目帖」、それぞれに書画を提供している。劉梅泉については、これまで田能村竹田、大田南畝、市河寛齋ら文人たちを清人と結ぶ役を担った以外あまり知られていない。

『蘭言雅集』（長崎歴史文化博物館所蔵）の王蘭谷の文は梅泉の父君雄（俊寛）に宛てたもので、梅泉一族の系譜を語っている。それによれば梅泉の祖一水は中国福州三山の人で万暦年間に兵乱を避けて天明5年（1785）長崎へ来た。以来、通事として代々務めた。長崎の鳴滝に山荘を構え、梅の名所であった。田能村竹田の『竹田莊師友画録』には梅泉について、詩書画にすぐれ、日常の居住まいも清らかであったことを伝える。ただし、竹田が長崎を訪れた文政9年（1826）にはすでに梅泉は没し、その山荘も垣根や門扉が壊れ、自



梅関送別幅 (東齋宛)



同 (南湖宛)



梅関送別幅 (東齋宛)



娛心遊目帖



梅関送別幅 (長崎歴史文博本)



娛心遊目帖

慢の梅もわずかとなってしまっていたという^(註17)。

呉墨酣 (楓山)

江稼圃に師事した。文化6年12月28日、稽古通事、文政3年12月21日、小通事末席となった(「鉄翁、逸雲、梧門、梅泉、墨酣年譜(渡辺庫輔撰)」(長崎歴史文化博物館蔵))とあり、梅泉同様通事であったと思われる。「梅関送別幅」、「娛心遊目帖」、すべての作品に書画を提供しており、梅関、梅泉に身近な人物であったかと考える。



梅関送別幅 (東斎宛)



同 (南湖宛)



梅関送別幅 (長崎歴史文化博物館蔵) 娛心遊目帖



3 『三界居録』、『蘭言雅集』と長崎の清人

仙台市博物館と東北大学附属図書館には、菅井梅関が写したとする『三界居録』と題した写本が分冊して所蔵される。この中に梅関送別幅の作者、とくに清人の書や書簡の写しがあり、彼らが贈った梅関あるいは劉梅泉などへの詩文などから、彼らの密接な関係が推測される。劉梅泉については先述した『蘭言雅集』に『三界居録』の文面と一致する文が複数あり、梅関が写したことがわかる。『蘭言雅集』以外は判明しないが、『三界居録』はそうした梅泉や梅関周辺の清人の贈詩、書簡を集めたものと思われる。『三界居録』のうち、『蘭玉

雅集』の写し以外は、長崎の清人から東齋(梅関)、簾布(青眼亭主人)に宛てた詩文が多くを占める。

『蘭言雅集』は、寛政11年、寛政12年、文化2年、文化4年に財福あるいは船頭として長崎へ来航した王蘭谷の文へ、江芸閣ほか、長崎に関係した清人たちが題字、詩文、書簡を寄せたものである。江芸閣の題字は甲戌(文化11年・1814)そのほかの年号は文化5年～文化11年秋までである。

以下、『蘭言雅集』に書を寄せた清人を掲げる(下線は『三界居録』に載る人物)。

・「梅関送別幅」の書画を寄せた人物

江芸閣、陸秋実、劉培原、張秋琴(敬修)、沈秋屏、鄒静岩、朱柳橋、金琴江、汪松巢

・それ以外で『蘭言雅集』に名が載り、来航歴がわかる人物。

王蘭谷 天明8年3番南京船、寛政11年番外厦門船、寛政12年4番南京船脇船頭、享和2年4番南京船、文化元年3番南京船、文化2年5番厦門船、文化5年9番船頭
程赤城 享和元年未2の番外船、8番船頭、享和2年9番10番船頭
錢位吉 文化2年4番南京船脇船頭、文化5年3番船脇船頭
錢省三 文化6年7番船財福
孫景雲 享和2年8番船頭
楊少谿 文化9年4番寧波船船頭、文化13年4番厦門船脇船頭、9番寧波船船頭

・来航歴が不明の人物。

顧震、徐榮、程嘉猷、程雪香、戴延祜、月波中客、顧廷霏、顧時雷

このように『三界居録』、『蘭言雅集』は「梅関送別幅」に書画を寄せた清人の詩文、書簡を集めていることがわかる。程嘉猷のように、「弟姓名嘉猷別号香蘭住姑蘇城外倘賜佳詠竟称香蘭」(『蘭言雅集』)と自身の紹介をする者もいるが、多くはどのような人物かは不明である。



『蘭言雅集』江芸閣題字



『三界居録』籠字題字部分

『三界居録』の朱柳橋が梅関にあてた詩は、

身所蓬洲地高踪不染塵欽君工澆墨筆底更生春崎
地客居

東齋先生善於山水以尺幅惠余占此以謝並政
(朱) 柳橋

と、東齋（梅関）が贈った山水の余白に朱柳橋が書いた賛と思われる。

江芸閣の書ももっとも多く、鄒静岩、金琴江、朱柳橋などの書も多くみられる。江芸閣は青眼亭をしばしば訪れ、詩書を作ったようだ。青眼亭主人（簾布）は、梅関と併記されることもあり、梅関がここに滞在した可能性がある。

鎮台（長崎奉行牧野成傑）待我多青眼 今日重
来青眼亭 主人風雅客不俗 此後相交各在心

仙姫濃紫早知名 応是総花未落莫不情江郎五彩
筆也 題一絶贈卿 //

濃紫校台正 江芸閣（『三界居録』）

青眼亭に日に何度も訪れ、主人はじめ客の友人たちと交渉をするようすがうかがえる。

梅関が長崎へ行く動機であり、のちにも師事したことを喧伝したはずの江稼圃との交渉が『三界居録』にはほとんど見られないことにも気づく。ここに梅関が劉梅泉に近づく一つの理由があると思われる。劉梅泉を通じて江稼圃の絵や絵画論を身につけたのではないかと思われる。

江稼圃は文化元年（1804）に長崎へ来航し、大田南畝、伊沢蘭軒に会い、文化5年には武元登々庵、翌6年には浦上春琴と出会い交渉があった。しかし、日本の書画家との交渉が頻繁であったのは、弟の江芸閣である。梅関の送別幅、送別画を見ても江稼圃の姿はない。

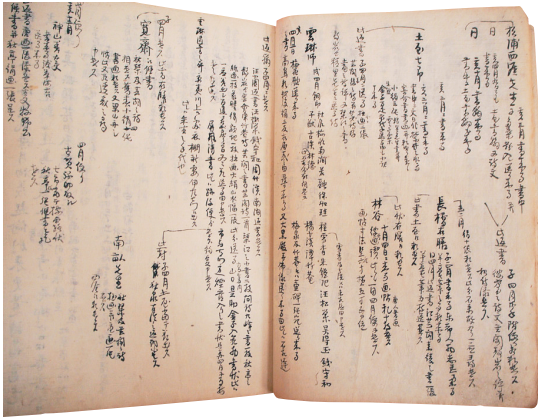
以上のことから、梅関は劉梅泉ほか長崎にいた清人や書画家たちと交渉したことが知られ、その送別幅の成立も首肯されると思われる。これにはさらに背景があるように考えているのだが、それは劉梅泉の『自遠録』という手記の内容から推察するものだ。

4 『自遠録』にみる劉梅泉と諸国の書画家

『自遠録』（長崎歴史文化博物館蔵）は劉梅泉の題簽がある手控えである。内容についての説明はなく、人名と住所を主にメモが簡単に記されたものである。



自遠録（表紙）



メモの内容は劉梅泉がやり取りの期日と自身の書画をはじめ清人の書画や長崎から送る画材などである。例えば、次のような記述である。史料の干支の「亥」は文化12年（1815）、「子」は翌13年である。これは「梅閑送別幅」の制作と同時期である。

杉浦西崖先生 亥三月書来る 書中に多葉粉（煙草）入レ送り来る并 此返書子四月昨年附便り相頼遣ス彼方分之詩文（江）芸閣（鄒）静岩之詩并和付添遣ス

同 亥四月九日ニも土屋書翰又詩文書来る

同 亥十月書簡来る

書中に土屋書翰も来る

亥三月ニ書来る

土屋七郎 亥六月ニ書来る

書中に（谷）文晁禁井かも取る 寄合書画并頼遣し置く 小絹三張（古賀）精里先生書并雲室など 金子百疋之代子送る由も小訳了来る

此返書子四月ニ送る拙小画（梅泉画）二張

（江）芸閣素綾之詩并笑詩及土屋之詩評又（金）栞江之書（鄒）静岩も（古賀）精里先生ニ送る詩

長橋右膳 子正月書来る東都人物志送り来る

羊毫筆之事頼み来る

同此返書江芸閣素綾之書一張

羊毫筆五枝送遣ス

此書土屋（七郎）江頼遣ス

雲琳師 亥四月二日之書 梅花歌送り来る

高嶋頼越後縮三反相屈成之由尋来る又大黒

殿并仏像送り来る由此レハ不相達

此返翰子四月ニ遣ス

汪小園返書汪松巢 錢守和 周竹溪 南澗返書

遣ス（鄒）静岩より寄会津竹庵詩（江）芸閣之

書芸閣詩一首（金）栞江之小書二枚問詩九峰之

書一枚秋亭（余崧か）之紙画一枚象膳絹額地一

枚拙画大絹山水幅一張此分送る（後略）

杉浦、土屋、長橋、雲琳、高嶋は江戸の文晁周辺の人物と思われ、土屋は大田南畝の狂歌にも詠まれるなど、彼らと交流があった人物であろう^(注18)。彼らが梅泉を通じて長崎の江芸閣、鄒静岩、汪松巢、錢守和など清人、梅泉の書画ほか、煙草、筆など画材も求めていた。杉浦西崖の自宅は『自遠録』に「江戸下谷三絃堀」とあり、谷文晁も同住所で近在の人物であったことがわかる。同時に儒者古賀精里へも清人の詩を送り、また、精里の書も求めた。

文晁に東原を通じて送った内容は、

文晁江

秋亭（余崧か）絹画一張素綾（江）芸閣書聯一對九峰書二張小溪 実ハ呉人之書也 名下之書二張同額字二張文露銘之墨二丁羊毫水筆一匣十枚此分送る外大絹幅五尺位凡長サ一間の余全幅青緑山水頼遣ス 出来の上東原より道々スル段を頼遣ス 文晁当三月出書状画并摺札等之贈物之礼も申遣ス

文晁および周辺の書画家、文人に、清人の書画や長崎で手に入る画材を届ける手配と文晁の絵の所望などを記す。また、梅泉は市河寛齋、大田南畝、田能村竹田、浦上玉堂とも交渉があった。

(市河) 寛齋江便書 子四月遣ス
此書右膳頼遣ス

(張) 秋栞及 (江) 芸閣之詩相遣ス旧春小絹四
張書画頼遣ス又梁山舟之帖此又相遙かゝ成之日
持申遣ス

市河米庵のコレクションの中には、絵の題跋として、江芸閣、張秋琴の詩書が用いられるものがある。梅泉が調達した清人の詩書の用途が推察できる^(註19)。

(大田) 南畝先生 (張) 秋栞及 (江) 芸閣之詩
拙画并唐画一張遣ス 西崖江頼遣ス

田能村行蔵 (竹田)
子三月廿三日出文化丙子南至之日書画展観之由
清客等書画頼來る新春詞七首牡丹自画に題來る

(浦上) 玉堂 子春頼置山水小絹送り來る彼方
頼唐人書小絹及五六寸四天拙画も頼來る絃然か
之事も頼來る

このほか『自遠録』に名があらわれる書画家は、浦上春琴、大西圭齋らである。また、著名な書画、学者以外にも、京都、金沢、出羽、越後など各地の武士、商人などの名と住所が記される^(註20)。梅泉はこうした全国の書画に関心がある人々に長崎の清人の書画、画材を送り届け、また、彼らからの書画を手に入れていたと考えられる。

18世紀末期から19世紀前半にかけて全国の学者、漢詩人など、いわゆる文人活動を行った人々が、長崎に向かったが、長崎からも書画を発信するシステムがあったことに気づく。

劉梅泉の『自遠録』のなかに、日本の書画家の住所のように清人の中国の住所を記している。帰国後も連絡をとることもあったのであろうか^(註21)。

梅泉は「鉄翁、逸雲、梧門、梅泉、墨酣年譜」によれば、文政2年8月4日に没しており、これらは梅泉が没する直前の活動でその後どのように経緯したかは今後の検討である。

5 まとめ 文政期文人活動における長崎

本稿では菅井梅関の送別の書画と「娛心遊目帖」の検討から、化政期に長崎を訪れた菅井梅関の周辺の清人や書画家との交渉の様相が同時期の国内の文人活動と深いつながりがあったことを指摘した。その背景には、谷文晁、市河寛齋ほか全国の書画家、文人たちの存在があった。梅関は長崎と彼らを結ぶ接点にいたともいえよう。梅関の送別に際して、複数の寄せ書き書画や送別図が描かれた理由であろう。また、『蘭言雅集』、『自遠録』など劉梅泉に係る史料は、もともと通事であった梅泉が清人や日本の書画家、文人と交渉する中で、自らも書画を作り、長崎においてだけでなく、長く彼らと交渉を続け、長崎を通じた中国の文人文化を提供した様子を示すことがわかった。

2021年秋、市河米庵所蔵の中国書画に関する展示が東京国立博物館東洋館で開催された（「江戸時代にもたらされた中国書画」展）。出品作品は市河米庵、そして、父の寛齋が長崎来訪を機として、収集した中国書画、書籍の一部であった。米庵、寛齋に代表される江戸の文人が、いかに中国の文物を吸収したかがうかがえた。その中には、江芸閣が劉梅泉に与えた漢詩扇面などがあり、梅泉が寛齋、米庵父子とつながっていた一面がここにもうかがえた。

本論でとりあげた清人たちは、専門の画家、いわゆる「来航画人」でなく、商人として訪れた人々がほとんどである。したがって、美術史では検討されることがなく、来航画人の賛者や日本の文人が長崎を訪れた際の交渉相手として認識される程度であった。

漢詩文においても頼山陽などが江芸閣との交渉を望んで、長崎に来訪するなど個々の交渉は検討されたが、本論の資料のように来航清人と広く交渉があつて、漢詩人が求める書画を発信する機能もあったことは知られない。米庵の収集資料のように、長崎を通じて得られた中国関係資料との照合も必要であろう。

化政期の日本の文人が長崎へ向かった現実の対象は、専門の画家や詩人ではなく来航した文人志

向の商人たちであった。彼らの詩書画を通じて中国の文人文化を吸収したが、それを各地へ供給した長崎の機能もあり、それに係った状況を指摘した。これも日本の文人活動の重要な一面であり、その源となった長崎の位置を再確認したい。

注

- 注1 「彼らは貿易活動をしながら長崎という場で多くの日本人と交流し、詩文・書跡・絵画などの明清文化を日本人に伝えた」錦織亮介「江戸時代の長崎来舶画人について」『黄檗文化』第139号 2020年7月
- 注2 高橋博巳「画家の旅／詩人の夢—菅井梅閑と長崎・京坂詩壇—」『金城学院大学論集 人文科学編』177号 1997年
- 注3 渡邊雄二「江稼圃・江芸閣と日本文人の交遊—斎藤秋圃筆 江稼圃像をめぐる—」『九州産業大学芸術学会研究報告』第51号 2021年
- 注4 「特別展 孤高の画人・菅井梅閑—没後百五十年記念—」図録 1994年 仙台市博物館
- 注5 注3、4
- 注6 長崎港図 落款「文化丁丑仲春下洗應徵寫於崎陽客館青眼亭中 仙台東齋菅義」（印）「仙台」「梅館」
- 注7 「die zigaan huisclijke zorgun afslooft heeft nimmer rust maan die dezelve rerlaat enzigtot reizen begaft genict vermaak」（家事を放棄する者には休息がないし、家事を放棄して旅の楽しみに埋もれる者には休息がない。）
- 注8 古賀十二郎『長崎画史彙伝』1983年
- 注9 鶴田武良「研究資料 鐵翁・逸雲・湘帆」『國華』1098号 1986年
古賀十二郎『長崎画史彙伝』江大来系 僧鉄翁は「文化中、来舶清人江大来号稼圃につきて、南宗画の法を修め」とある。
- 注10 ソウル大学校大学院博士課程カン・ヒョン(강희연)氏教示。氏は兩足院と朝鮮通信使、対馬以酊庵への輪番僧とのかかわりを示唆されている。また、その名、萊嶽が東萊府を暗示させるが、安重観(1683-1752)の『悔窩集』から、この「萊嶽」が蓬萊山、つまり金剛山を意味することも指摘している。残念ながら文化年間の通信便の中にその名を見出すことができなかつた。氏は智讀の詩についても李璽(1522-1600)の『松窩雜説』の一詩であることを指摘する。
- 注11 中村賢「日本来航唐船一覽 明和元～文久元(1764～1861)年」『九州文化史研究所紀要』41, 1997年、錦織亮介「江戸時代の長崎来舶画人について」『黄檗文華』139, 2019年、唐 權・劉 建輝・王 紫沁「来舶清人研究ノート：附「来舶清人参考文献」「来舶清人一覽表」」『日本研究』62, 2021年。
錦織亮介氏より長崎へ来航した中国人のデータベース「長崎来航中国人名索引」を提供いただき、それにより、今回多くの確認ができた。
- 注12 主な作品（題字）市河米庵「丙戌葭月 米庵玄書」（作品）1 牧牛図 阿部正精「棕軒写并書」2 花卉に蝶図 増山雪齋「顛？」翁雪齋写」4 昇竜図 牧野忠精「乙巳秋九月乾」齋画」5 山水図 大岡雲峰「雲峯」7 桃に小禽図 柏亭 10 唐辛子図 栗本丹洲「戊辰重陽日写之栗昌歳？」11 靈芝図 井上薫烈「櫻齋写」13 榴槤に小禽図 桂川甫賢「十三童国寧」16 山水図 鼎春嶽「丙寅正月做黄雀山樵筆意春嶽」19 山水図 八木翼所「翼所写」21 木蓮？図 岡田半江「丙寅仲夏半江田肅」23 柳下独釣図 加藤梅翁「戊辰秋写惠亭勝繼」28 漁夫図 谷口月窓 31 雀図 円山応岱「席上写円応岱」33 山間独居図 桜井雪保「秋山」35 梅図 清水曲河「曲阿」38 桃図 金子金陵 39 竹図 森川竹窓 40 小禽図 岡田閑林 43 山水図 谷文晁 44 山水図 淵上旭江？「旭江写」45 山水図 遠阪文雍 47 猿図 森祖仙「祖仙写」48 山水図 龍山「平安竜山写」49 梅図 西川蕙園「乙丑秋日写西川氏蕙園」50 人物図 平田玉蘊 51 人物図 月僊 55 香を焚く人物図 中村仏庵「仏庵并頭」58 鶯鳥画人図 川村文鳳 59 蘭図 岸駒 77 蘭に蜻蛉図 鑄木雲潭 83 雀図 柴田義董「義董」84 山水図 岡本豊彦「豊彦」85 羅漢図 紀広成「紀廣成」86 岩に若松？図 東東洋「東洋」87 椿図 上河淇水「淇水」89 山水図 春木南溟「南溟」90 山水図 森東溪「東溪」贊 森玉岡「一笠竹者」92 蝶図「雀洲」93 雀図 岡田玉山「法橋玉山」100 寿老図 依田竹谷「竹谷」102 山水図 岡野竹痴？「竹痴」105 蛙図 仁科錦川「錦川」106 蘭図 春木南湖「南湖」
- 注13 市河三喜「長崎と米庵及び寛齋」『商業と經濟』18, 1937年
- 注14 石崎融思「象と黒人の図」（長崎歴史文化博物館蔵）、石崎融思図『全象活眼』（神戸市立博物館）、渡辺鶴洲 象図（神戸市立博物館）ほか長崎版画にも文化10年に長崎に来た象が描かれる。
- 注15 『竹田莊師友画録』熊勇の項「山水仿董法、自（熊勇 秋琴）言得之江稼圃、近日鎮人作畫、如鐵翁、逸雲諸君、往々皆然、」
- 注16 前掲『江戸名作画帖全集X』星野鈴氏解説
- 注17 聞平日所居、房椀華潔、簾幕深邃、衣服清楚、飲食豐盛、異書萬卷、及名人書畫、陳列左右、坐則煮茗插花、出則照鏡薰衣、（中略）予與秋琴、一日

郊遊、晚過一廢園、垣墻破壞、門扁欹側、滿地荒涼、只見瓦礫數堆耳、秋琴乃指曰、昔之梅泉莊是也、予愴然顧視、老梅數樹、朽餘僅存、有寒泉一條、潺々從樹下流出、其聲嗚咽、似泣而訴怨者、
 (『竹田莊師友画録』劉梅泉)

注18 磯崎康彦「享和文化年間の谷文晁」『福島大学人間発達文化学類論集』26, 2017年

注19 塚本充麿「市河米庵・寛齋と董其昌」(『美術史論叢』36 2020年)に市河寛齋が文化11年に長崎で入手した劉儵筆「山水図」(東京国立博物館)に同年に張秋琴、江芸閣が題跋を記したことを指摘する。『瓊浦夢余録』にこれらの詩が掲載され、張秋琴から贈られた絵であった。これらについては寛齋が長崎滞在中で、直接、清人に依頼したと考えられるが、その後も梅泉を通じて、清人たちの書画あるいは中国書画を入手したと思われる。

また、『自遠録』には江芸閣、張秋琴(琴)が寛齋に宛てた詩が載る。

懷寛齋先生

山水悠々道路長 鄉雲何日到崎陽
逢來筆硯荒涼甚 冷卷總篇与短章
蘇台江芸閣初稿

風塵落拓未成名 漫挽棊書海上行
瓊浦也曾聯俊彦 扶桑而外一先生
暮年筆波闌老傲 世襟期冰雪清
多愧題詩謬 相許憐才沈范不勝情

拙句奉呈

寛齋老先生 晒政 秋棊張敬修拜稿

注20 加州 龜田喜左衛門(舜年)同 九右衛門
羽州莊内酒田 淨万寺公巖 同所 本間信次郎
出羽米沢上杉侯家中 神保玄助
出羽殿上山形 神保金吾
京四条通東洞院 小田南豊
越後葛塚 小柳作左衛門

注21 杭州西湖艮山門内貢院前威乙巷德星樓内門
譚竹庵

蘇州閶門外上津橋下塘大街施家浜橋東挽

沈萬珍 秋屏 筠谷

蘇州閶門外上塘街廐家街内恒善堂間壁

江稼圃 江芸閣

蘇州閶門内玄妙觀前宮巷内

鄒静岩

蘇州閶門外聞德橋内

蔣春洲

江稼圃、江芸閣だけでなく、沈萬珍、秋屏、筠谷も同じ家の人物とわかる。なお、譚竹庵は市河寛齋との親しい交渉が知られる^(注19)。

本稿の資料調査や内容について、仙台市博物館樋口智之氏、寺澤慎吾氏、東京藝術大学美術館古田亮教授、東北大学附属図書館情報サービス課貴重書係、長崎歴史文化博物館 長岡枝里氏、錦織亮介北九州大学名誉教授には格別の配慮、教示をいただいた。深く感謝したい。